

の軽減と2人が安心して生活できる環境をつくることが重要であり、私たちは、MSWの介入や社会資源の導入が必要と判断した。そして、家族を含めたカンファレンスを行い、在宅療養するうえでの不安について情報を得た。夫からは、「実際に排泄の介助ができるか」という不安の訴えがあったため、入院中に排泄介助や体位変換の方法を夫に指導し、実践した。夫は食事や洗濯、掃除はできるとのことで、主にM氏の身体介護に対してMSWに介入を依頼し、毎日介護保険サービスを利用できるよう計画した。また、褥瘡の処置や膀胱留置カテーテルの管理は、訪問看護やケアマネージャーで対応できるか確認し依頼した。そして、退院後1週間在宅で過ごし、その後入院するといった方法を提案し、在宅での介護サービスの充実を図った。また、退院後はいつでも再入院できることも伝えた。その結果、在宅療養が可能となり、在宅療養中に入院を1週間延期したいと連絡があり、約2週間の在宅療養を過ごすことができた。その後は2週間入院し、2週間を在宅で過ごすといった経過をたどることができた。

私たちは、2人の漠然とした不安に対してひとつひとつ介入したことが安心感につながり、在宅療養する中で2人が少しずつ自信を持てるようなサポートができたのではないかと考える。

## 2. 大腸癌のターミナル期における在宅の看取りへのサポート

中澤たけみ、藤田 欣一、山賀 節子  
青木 和俊、高橋 郁子、佐藤あや子

(真木病院)

【目的】ターミナル患者の在宅移行は、病状悪化のタイミング、家族のサポート、本人と家族との関係など、多くの問題があり難しい課題である。今回、在宅にて看取りの行えた症例を振り返り、課題解決の答えを明らかにし、今後のターミナルケアに活かしていく。【患者紹介】氏名K・I氏 女性 60歳代 家族背景 夫、長男との3人暮らし。千葉、神奈川に息子夫婦がいる。50歳代 直腸癌にてマイルズ人工肛門造設術、50歳代 骨盤内リンパ節転移 化学療法(LU-LF4クール)、60歳代 PET-CTにて肺転移 リンパ節転移 SIL1に骨転移(高崎病院にて照射5回)、60歳代 自宅にて座位困難となりペインコントロール目的にて入院。【方法】事例の看護記録、カルテより、入院時から退院時までを情報収集・分析を行った事例研究【倫理的配慮】事例の患者家族に研究の主旨、方法を説明し了解を得た。また、個人が特定されないようプライバシーの保護に配慮した。【考察】入院期間約9ヶ月の患者の心境、病状悪化への受容の変化の中で、患者家族の療養の場の意志決定支援、地域ネットワークの活用によりタイミングよく情報提供出

来たことが、在宅移行を可能にしたのではないかと考えられる。【結果】ターミナル期における初期の段階からの意志決定支援を支えることにより、患者、家族の気持ちに寄り添った看取りを行える。

## 3. 空腸癌患者が望む在宅での看取りへの支援

関口 恵子、柿沼 春香 (総合太田病院)

60歳代女性。空腸癌末期患者の在宅療養が始まり、CVの管理・疼痛コントロール・清潔援助のため訪問看護が開始となった。患者に病名は告知されていたが、予後については家族のみに説明されている状態であった。キーパーソンである夫は予後への不安があり介護にも消極的であった。日常生活は自立され、TPNの交換や麻薬管理、入浴は行えていた。疼痛・不眠・嘔吐の訴えが続き、予後への不安が聞かれるようになり、終末期に対する家族と本人の思いにズレが生じてきた。患者と家族の思いを傾聴し、必要な情報提供を行い、選択を尊重し調整を図った。夫は病院での看取りを望み、本人は在宅を望んでいた。調整は、現状を説明し、本人の姉妹に協力を得て夫をサポートするとともに、本人の思いを夫に伝えてもらうようにした。結果として、離れて暮らしていた子供達が本人の意思に添う形で看取ることができた事例である。

## 4. がんと闘う

影山 晃一

### 1. がん夫婦の闘病記録

私は大腸がん、骨転移、妻は大腸がん。夫は現在もがんと共に生活し、妻は昨年天国に旅立った。

### 2. 妻の末期がんと介護日常生活

妻ががんになり、最後の一年三ヶ月。要介護5の認定により、介護保険を使用し、自分も介護にあたった。最後の一ヶ月間の緩和ケア病棟に入院し、旅立つまでの日常生活の中で、医師との関わりについて、色々と考えた。

### 3. 妻が残した最後の言葉

妻が苦痛の中で、笑顔で、死の直前まで話した「ありがとう。お父さん」という感謝の言葉がずっと記憶に残っている。また、病院で世話をさせていただいた看護師さんへの感謝を忘れない。

### 4. 緩和ケア病院より、家族に対して

温かいホロリとする手紙をいただき、涙が止まらなくなった。感謝の言葉を知らせたい。

### 5. がんは恐ろしい病気ではない

早期発見で直すことができることを周知する運動をしたい。医師を信じること、治癒への研究も進んでいることを知ることが大切である。